
ブルームーンに願いを

cocotte

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブルームーンに願いを

【Nコード】

N7168Z

【作者名】

cocotte

【あらすじ】

100年に一度

真っ青な月が空に浮かぶ。

浮かびあがり、満ちて欠けて消えるまで・・・。

100年に一度訪れるブルームーンイヤー。

青白い月に照らされた街に、世にも奇妙な出来事が訪れる。

第一話 【ケーキ泥棒?】（前書き）

前作・【優しい魔法の使い方】と同じ世界の物語です。
シーナ・トッドも少し登場します。

【優しい魔法の使い方】をご覧にならなくても楽しめる作品として
います。

更新が遅いと思いますがどうか長い目で見守っていただけたらと思
います。

第一話 【ケーキ泥棒?】

100年に一度

真つ青な月が空に浮かぶ。

浮かびあがり、満ちて欠けて消えるまで・・・。

100年に一度訪れるブルームーンイヤー。

青白い月に照らされた街に、世にも奇妙な出来事が訪れる。

+
+
+
+
+
+
+
+
+
+
+
+
+
+
+
+
+
+
+
+
+
+
+
+
+
+
+ +

ここはある街のケーキ屋さん。

甘い香りの溢れるケーキ屋は今日也大盛況。

この物語の主人公は、そのケーキ屋さんのパティシエの右腕として
働く

マカという女の子。

まだまだ右腕見習いのマカは今日も、閉店後の厨房に残り

せつせとケーキの練習中。

「お疲れ様、暗くならないうちに帰るんだよ」

「お疲れさまでした！」

オーナーパティシエのロイがマカに声をかけ厨房を去った。

そして厨房に残ったのはマカ1人。

「さて・・・と！作りますか」

マカは材料を用意して腕まくりをする。

マカは夜な夜な厨房に残ってはケーキを作り修行を行っていた。

今夜のケーキはマカお得意のレモンケーキ。

砂糖・バター・レモン。

甘酸っぱい香りが厨房を包む。

「今日こそ見つけ出してやるんだから・・・」

材料を混ぜながらマカは呟いた。

そうこうしているうちにレモンケーキは完成。

マカは厨房の外に設置してある大きな冷蔵庫にレモンケーキをしまう。

そしてマカは冷蔵庫の横に座り込んだ。

「さあ・・・出てきなさい。ケーキ泥棒」

マカが冷蔵庫に張り込むのには理由があった。

つい先日から、マカが夜な夜な作っては冷蔵庫にしまうケーキが

次の日に忽然と姿を消しているのだ。

ケーキ屋の同僚達も誰も食べていないと言い張る。

それが毎日続いたため、ついにマカは厨房に張り込みを決意した。

月明かりが照らす、ケーキ屋の裏庭。

冷蔵庫の横に張り込んで早数時間。

時刻は夜中の2時を回ろうとしていた。

「やっぱり・・・無理だったかな」

諦めて帰ろうとしたその時

青白い月明かりの照らす裏庭の先に、人影が見えた。

「あ・・・」

そこに現れたのはピエロの様な奇抜な衣装に身を包み、ステッキを持った青年だった。

「おや、御機嫌ようお嬢さん」

青年に優しく微笑みかけられたマカはハッと息をのむ。

すると青年は何の迷いもなくケーキの入った冷蔵庫に手を伸ばす。

「ちよっ・・・待ちなさいよ！ケツ・・・ケケ・・・ケーキ泥棒！！」

マカは慌てて立ち上がる。

青年は手を止め、きょとんと首をかしげる。

「なんと、泥棒とは失礼な。誰にも食べてもらえないケーキを頂いていただけですよ？」

そう言うと青年は再びマカに微笑みを向ける。

あまりに悪びれない態度にマカは言葉を失う。

しかしすぐに首をブンブン振り呟く。

「あ・・・あとで私が食べるつもりだったのよ！」

マカはバツが悪そうにつぶやく。

その表情をみて青年はクスクスと笑いだした。

「それはそれは。大変失礼な事をいたしました。てっきり誰にも食べてもらえないまま捨てられてしまうのかと思ってしまったものですから。」

クスクスと笑う青年にマカは顔を赤めらせ呟いた。

「...あなた...誰なの？」

「さあ、誰でしょう。ただのケーキ泥棒かもしれません。」

青年はマカに今度はからかうような笑みを浮かべる。

「人をおちよくってるの!？」

「さあ...どうでしょう。それよりこのレモンケーキ、一口いただきますね」

「あれっ!？」

青年の手にはいつの間にか、三角にカットされたマカの作ったレモンケーキが乗ったお店の皿とフォークを持っていた。

「では・・・」

青年はゆっくりとレモンケーキを口へ運んだ。

「……………」

マカは、練習中に作ったケーキを、店の同僚以外に今まで人に食べさせたことが無いため

味はどうか気になり、青年の反応を待つ。

「んん〜」

青年は幸せそうな笑みを浮かべて頬をさすった。

「美味しいですね、このレモンケーキ。甘酸っぱくて、それでいてなんて爽やかな後味。

私このケーキとっても気に入ってしまいました」

「本当!？」

初めて自分のケーキを、それも得意のレモンケーキを食べた人物の高評価にマカにも笑みがこぼれる。

「ええ!明日も楽しみにしてますね!」

「……………はあ!？」

さらりと宣言された言葉にマカは戸惑い声を上げてしまった。

「では、また明日この時間に。しぎげんよう」

そう別れの挨拶を告げると

ケーキ泥棒は悪びれもせず闇夜に消えていった。

マカは冷蔵庫の横にしばらく呆然と立ち尽くしていた。

+ + + + + + + + + + + + + + + + +
+ + + + + + + + + + + + + + + + +
+ + + + + + + + + + + + + + + + +
+ + + + + + + + + + + + + + + + +

「何なのよ！あの人をおちよくったような態度！泥棒のくせにいい！」

そう独り言を呟きながらマカはひたすらメレンゲを作る。

「随分機嫌悪いね」

そこにオーナーパティシエのロイが声をかける。

「わっ！すみません・・・」

マカは顔を赤くして俯く。

「いいよ、何かあった？」

ロイは優しく微笑んで問いかけた。

「や…何でもないです！」

あんな奇妙な出来事、信じてもらえるわけがないと思い、マカは口をつぐむ。

「そ？せつかくのブルームーンイヤーなんだから、不機嫌で過ごす
と勿体ないよ」

「ブルームーン？」

マカはメレンゲを作る手を止め不思議そうにロイを見つめる。

「知らないの？最近月が青色でしょう？青い月が出るのは百年に一度。月が満ちて欠けるまで、たくさんの不思議な事が起きるって伝説なんだ。」

「へえ〜」

「だから、ムツスリしてたら勿体ないよ？」

そう告げるとロイは、かき混ぜるジェスチャーをして仕事を続けて、とサインを送る。

「はあ〜い！」

マカは笑顔を取り戻し再びメレンゲ作りを再開する。

そしてその日の夜・・・

マカは今日の練習の為のケーキとは別にレモンケーキも作ってしまった。
っていた。

「・・・なんか・・・あんなに期待されたら作らずにはいられない
というか・・・」

マカはそう独り言を呟いた。

そして午前2時、再び青年は現れた。

「御機嫌よう。お嬢さん」

青年は昨日と同じように柔らかな笑みを浮かべる。

「本当に夜に現れるのね」

「夜にしか、この姿でいられませんので。陽の光の下だと私は影になつてしまいますから。」

「そしたら何にも触れることが出来ません。」

青年はふいにマカの髪に触れる。

「かつ・・・影？」

マカは顔を真っ赤にして青年の手を振り払い聞いた。

「そう、陽の光や…街灯の光も私には強すぎて・・・影になつてしまふ。そう、この姿を保つには・・・淡い月明かりが丁度いい。」

青年は青い月に照らされ空を仰ぎ目を閉じる。

「……………」

マカは青白く照らされた青年に一瞬見とれてしまふ。

「そういえば・・・お嬢さんのお名前を聞いていませんでしたね。」

「あなたの名前は？」

「へ・・・？・・・マカだけど・・・っ!？」

なんの警戒心もなく名前を言ってしまった。

思わず両手で口をふさぐマカ。

「マカさんですか、私の名前はジンと申します。以後お見知りおき

を・・・さて」

ジンはマカに会釈をすると冷蔵庫に視線を向けた。

マカも冷蔵庫に視線を向け再びジんに視線を戻すと

昨日の様にジンの手には既にレモンケーキがあった。

「今日も作ってくれたんですね。嬉しいな」

ジンは幼い子どものような笑みを浮かべた。

「貴方強引なんだもの・・・私にだって良心ってものがあるでしょ」

「ありがとうございます、では・・・いただきます」

ジンはケーキを口へ運ぶ。

「ん〜」

昨日と同じように頬に手を置き幸せそうな表情を浮かべるジン。

「そんなに・・・美味しい？」

「ええ、頬が落ちるかと思うくらい。」

マカはあまりの嬉しさに表情が緩む。

「お世辞でも嬉しいなあ、オーナーにはまだまだだって、褒められたことなんて一度もないから」

「お世辞だなんてとんでもない。しかし私の味覚もアテにはなりませんしね。」

もしかしたら、他の人が食べたらものすごい不味いと評価が下るかもしれないね」

「そんなっ・・・、そこまで不味くないわよ!」

「ただ私は、このレモンケーキ、今まで食べたどんなものよりも美味しいと思いますよ。」

マカは顔を真っ赤にする。

「そんなっ・・・歯の浮くような褒め言葉よく平気で言えるわね!」

ジンはきよとんとした後、クスリと笑った。

「せっかく誰かとお話できる機会に、伝えたい言葉を出し惜しみするなんて私には出来ません。」

そしてジンは背を向ける。

「何百年と生きていながら私は、両手で数える程の人としか話したことが無いんです。」

高い所から、楽しく活き活きと暮らす人々を眺めては羨む日々。

あの中に入れたら私は何を話そう?

例えば、朝一番の賑わう街で、卵をちょうだい。おいくらですか?

おはよう奥さん、ご機嫌いかが？
パン屋さん、焼きたてのパンをくださいな。
ああなんて素晴らしいんだろう」

ジンは月明かりの下、クルクルと舞いながら話す。
そして糸が切れたようにピタリと動きを止める。

「でもそんな日々、私には一生訪れることはありません。

だって、陽の下に出れば私は影と化してしまう。

夜の街灯でさえ私を真っ黒い影に変えてしまう。

夜には月明かりが無ければ影は闇に食われてしまう……。

月に照らされる時にしか、私はこうしていられないのだから。

人と、お話しすることも出来なければ、こうやって美味しいケーキを食べることだってできない。」

さっきまで子どもの様に笑っていたジンの表情が一変。

悲しそうな表情を浮かべるジン。

「よかつたら……これからも作るうか？ケーキ……」

マカがおそろおそろ呟いた。

「本当に……？レモンケーキですか？」

「レモンケーキでいいの？飽きない？」

「ええ！レモンケーキがいいんです、本当に？本当に作ってくれる

んですか？」

ジンは目を輝かせてマカに詰め寄る。

「いいわよ、私も一種類だけじゃ練習にならないと思ってたから。練習用のケーキにもう一品、レモンケーキ」

「嬉しいです！ああ今日はなんていい日なんだろう！」

ジンはまたクルクルと舞いだした。

そうして2人の夜の密会が約束された。

第一話 【ケーキ泥棒?】 (後書き)

第一話、いかがでしたでしょうか。

マカとジンの行く末を、温かく見守っていただきたいと思います。

第二話 【お化け?】 (前書き)

ジンとマカの秘密の時間。

だんだんジンという人物が明かされていきます。

彼は一体誰なんだろうと思いつつながら読んで頂けると光栄です。

第二話 【お化け?】

あの日から、マカとジンは約束の時刻にケーキ屋の裏庭で会うようになった。

「こんばんは、マカさん」

「こんばんは」

マカは照れ臭そうに、そっぽを向いて挨拶をする。

「いつも、待っていてくれるんですね。ケーキ屋は朝早いのでは?」

ジンは申し訳なさそうな表情を浮かべてマカを見つめる。

「だって…話し相手、ほしいんでしょう?」

「優しいんですね、マカさんは。」

ジンは優しく微笑むと、庭の大きな石に腰かけた。

「はい、今日はマムレードとホワイトチョコレートでコーティングしてみました!」

「わあ、美味しそう。いただきます」

ジンはいつものように幸せそうにケーキを口に運ぶ。

「……………どうかな」

「うん、とーっても美味しいです。」

ジンはニコリと笑みを浮かべた。

「そうだ。近いうちに…雨が降ります。その時は…私もこちらに
来れませんかし、夜ふかしせずに。
ゆっくり休んでくださいね。」

「ねえ、あなた普段、何をしてるの？」

マカは庭に置いてある、白い椅子を、ジンと向かい合うように置き、
腰かけた。

「普段ですか？そうですなえ……………」

ジンはケーキを食べる手を休める。

「絶えず移り流れる時の番をしているといいますが…………
この街に流れる時の流れが狂ってしまったくないよう守り、未来まで
流れ移り続けていることを伝えるのが役目でしょうか。」

「鐘つきさん？」

「ん、惜しいです。」

ジンは苦笑する。

「あなたの言葉は難しいわね、職業名はないわけ？」

「ん、職業というのも違うのかもしれないよな。」

「変わってるのね」

マカは難しい顔をしたあと、諦めたようにため息をついた。

「確かにそうかもしれませんが、でも大変なんですよ。」

生まれてこの命尽きるまで、人目に触れることなく永遠に役目を果たし続けることは。

自由になれる時間は限られていますしね。」

「その時は、何してるの？」

ジンはふと寂しそうな表情を浮かべた。

「自由になれる時には、散歩したり・・・ですかね。」

月明かりに照らされなければ影として誰にも気づかれませんし。それくらいしかすることがありません。誰とも話したり出来ないんですから。

だから散歩の他には・・・ただ、ぼんやりとしています。

影も喰われる雨降る闇夜なら、ぼんやりしながら、まるで雨水に意識を溶かされていくように、
静かに…そして、そのまま眠ってしまいますね」。

「そうなんだ」

寂しそうなジンの表情がうつつたのか、マカも少し寂しげな表情になる。

ジンはいけない、と首を横に振り、パツと笑顔を作りマカに問いかけた。

「マカさんは、雨の日もお店でケーキ作りですか？」

「うん、もちろん!」

「じゃあ、お休みの日は、何を？」

ジンは楽しそうに問いかける。

「休みの日は…買い物に行ったり、本を読んだり。あとケーキ作りかなあ」

「お休みの日もケーキを？」

「ええ、大好きだから!」

生き生きとしたマカの表情をジンは優しく、どこか寂しそうな表情で見つめていた。

「素敵ですね。お買い物に、読書に、ケーキ作り。」

「……………」

マカの表情が曇る。

「あ…気にしないでください！元々私とマカさん達とは住んでいる世界が違うんです。日々の過ごし方だって違うのが当然です」

ジンは再び苦笑する。

それがマカには無理して笑みを作っているようにみえていた。

「ねえ、一体あなたは誰なの？何処からここへ来てるの？」

マカは真剣な表情でジんに問いかけた。

「私は…さあ、誰でしょうか」

ジンは石から立ち上がり背を向ける。

「またそうやって」

「あててみてください、私は一体…何者でしょう」

ジンはクルツと体を回して振り返りニコリと微笑む。

「……………お化け…とか？」

マカはいたって真面目に答えた。

「お化け…プツ、アハハハハ」

ジンはお腹を抱えて笑いだした。

「だって、いきなり現れて、消えたり！明るい場所にいられなかったりするんでしょー！？」

マカは顔を真っ赤にする。

「そうですね、お化け。私はお化けなんだと思います」

「その言い方、また誤魔化してるでしょう」

「さあ、どうでしょう」

子どもをからかうようにジンはマカを軽くあしらう。

「…怒るわよ」

「だけど…本当にお化けなら、月の出ない闇夜に怯えたりする事もなくてすんだり…同じお化けとお友達になれたのでしょうか」

ジンは月明かりの届かない木々の陰を見つめる。

「…淋しいの？」

「分かりませんが、淋しいという気持ちがどんなものだったのかすら…忘れてしまいました。」

ジンはマカと目を合わすのを避けるようにじっと木の陰の間を見つめていた。

「……」

「ケーキ、ごちそうさまでした。では…私はこれで」

ジンは会釈をする。

「明日も…来るんでしょう？」

ジンは意外そうにパチクリと目を瞬かせるとふわりと微笑んだ。

「…美味しいレモンケーキ、食べるにきますね」

そしてジンは闇に姿を消していった。

.....
「雨降っちゃった……」

ケーキ作りの修行も終え、早々と帰宅したマカ。

シャワーを済ませ寝る準備にはいると電話の子機を手にする。

そしてベッドに座ると、友人に電話をかけた。

「もしもし?」

「シーナあ、どうしょ。私お化けが見えるの」

「ええ!?!」

唐突な話題の振りに受話器の先のシーナは驚きの声を上げる。

「それも甘党……」

「か・・かわいいお化けだね。」

「ね、トッドさん、物知りなんでしょ?何かしらない?甘党なお化けのこと……」

「甘党なお化けかあ。うん、聞いてみるよ……」

「お願いね」

「ね、そのお化けさんと仲良しなの？」

「私が！？まさかあ。ケーキ泥棒なんて」

「あはは、泥棒さんなの？」

受話器越しに笑い声が聞こえる。

「そうよ？夜な夜な現れて、私が練習に作ったケーキを食べるのよ？」

「美味しいって言ってくれた？」

「・・・うん」

「マカの作るケーキは美味しいもんね、私大好き！中でもレモンケーキは絶品で」

「あっ！」

「どうしたの？」

「彼も・・・レモンケーキ好きだって」

「あははは」

「もうシーナさっきから笑わないでってばあ！」

「ごめんごめん。なんだか、マカがそのお化けさんの事
そんなに嫌がってないような気がして」

「はあ!？」

「今日は来なかったの？その泥棒お化けさん」

「今日は・・・雨だから。」

彼、月が出てる時にしか来られないんだって」

「ねえマカ、寂しいんでしょ」

「もうっ！寂しくなんかいいわよ、あんなワケのわからない男」

「そっかそっか。」

「シーナの意地悪っ、からかってるでしょ」

「からかってなんかいいよ!ごめんね、ちゃんとトッドに聞いてお
くから。何か分かったら電話するね」

「よろしくね!あ、そうだそっちは最近どうなの？進展あった？」

「ううゝ・・・それがなかなか」

その日は夜更けまで2人はお互いの近状を語り合い終わった。

次の日。

いつものようにマカはオーナーと並んでケーキの仕込みの準備をしていた。

「ねえオーナー」

「なんだい？」

「月の満ち欠けって、30日くらいなんですよね」

「そうだね。大体そのくらいだね」

マカのメレンゲを作る手に力が入る。

「今出てる青い月・・・なんだか満ち欠けが早い様な気がするんですけど・
・気のせいですよね？」

「いや、気のせいじゃないね。それはブルームーンだからだよ」

「え？」

マカの胸がチクリと痛んだ。

「特別な月なんだよ、ブルームーンは。だから満ちて欠けるまでが
普段の月より早いんだ。

「普段出てる月の満ち欠けの早さの・・・半分くらいって言われてる
ね」

「半分っ！？ うわわっ・・・」

マカは思わず手に持ったボウルをひっくり返しそうになってしまった。

「随分気になってるみたいだね。ブルームーンのこと」

「そ・・そんなことないです。」

そう言いつつマカの頭はジンのことではいっぱいになっていた。

彼はこの事を知っているのだろうか。

だとしたら、ただでさえ短い期間、雨が降ることで外に出られないことをどう思っているだろう。

彼にとって限られた時間があまりに少なすぎる。

そんな貴重な時間を私のケーキを食べることに費やして彼は本当にいいのだろうか。

自分のケーキなんかで。

「マカ」

「はいっ!」

「大丈夫? なにか心配事?」

「だっ・・大丈夫ですごめんなさい」

「無理しないで。なにか悩みがあるなら聞くよ？」

「ありがとうございます。平気です」

マカは両頬をペチンを叩くと再び作業に集中した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7168z/>

ブルームーンに願いを

2011年12月24日11時51分発行